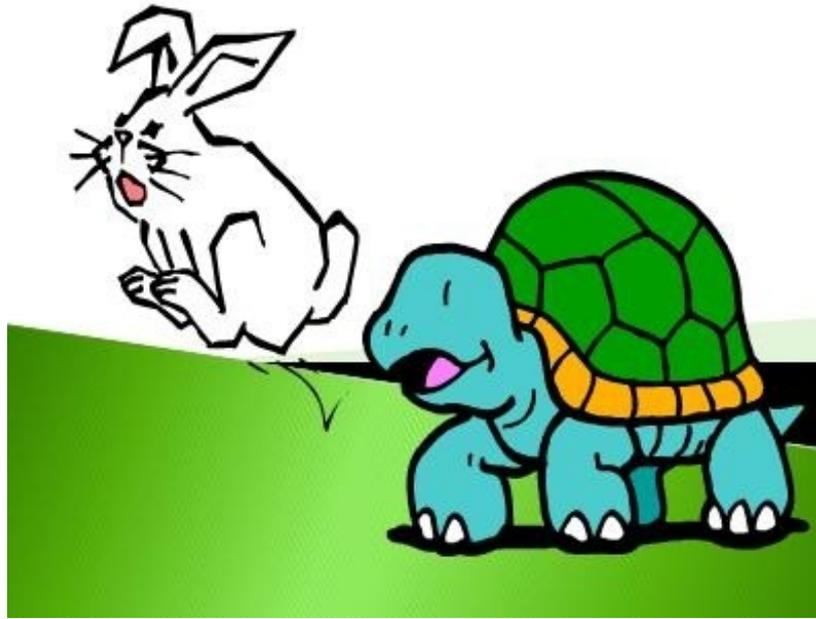


[新説]
ウサギとカメ
～カメ編～



カメはウサギの説得を断ろうとしていた。

「イヤですよ～。走るなんて」

「今回はお前に決めたんだ。いいから走ってくれ！」

「なんでボクなんですか～。もっと速いヒトはいっぱいいるじゃないですか」

今年の町内対抗駅伝の選手として、カメが選ばれたのだった。

いや、選ばれたと言ってもまだ決まったわけではない。

キャプテンのウサギがカメに出場するよう説得している所だった。

走るのが苦手なカメはウサギがいくら言っても首を振り続ける。

それでもウサギは、なぜかカメの出場にこだわっていた。

カメが「なんでボクが…」というのは、ただイヤだという理由ではなかった。

チームのことを考えても、走るのはカメでない方がいいというのも本心だった。

ウサギは最後の手段を繰り出すように一つの提案をしてきた。

「わかったよ、カメ。じゃあこうしよう。オレとかけっこ勝負をしよう。

そこでお前が勝ったら出場しなくていい」

ただし、同条件ではカメが勝てる見込みはない。

それを分かっているウサギは自ら条件をつけた。

---ウサギはハンデとして「おもり」をつけて走る。

ただし、その「おもり」はカメが今から1週間付けていたものとする---

「これならお前にもチャンスあるだろ？」と、ウサギはカメの方を見る。

勝ったら走らなくていいなんて、何だか変だとカメは感じたが、ここまでされてしまえばもう引き下がれない。しゅしゅではあるが、カメはその勝負を受けた。

「どっちにするか選べ」ウサギは2種類の「おもり」を用意して言った。

1つは足に巻くバンドタイプのおもり。これは着けやすいが重くはない。

もう1つは砲丸のような球の「おもり」が鎖に繋がれたもの。これは明らかに重い。

カメが砲丸を選べば、勝負の時にウサギが付けるものも砲丸になる。

カメが軽い方を選べば、ウサギの重りも軽いものになる。

カメは、迷わず砲丸を選んだ。

「ボクが勝つにはこちらを選ぶしかチャンスはない」そう思ったからだ。

砲丸を手を取った瞬間、カメにはウサギが一瞬笑ったように見えた。

* * * * *

そして、1週間が経ち、ウサギとカメのかけっこ勝負の日となった。

よく晴れた秋の空。

遠くの方にはまだ地平線の赤色と上空の青がグラデーションしている。

誰もいない早朝の道は、勝負の舞台にふさわしかった。

カメが大きく息を吸い込むと、鼻から冷たい空気がたっぷりと入ってきた。

いつになく気合いが入っていた。

いつもやる気なさそうにのんびりしているカメとは顔つきが違った。

一週間前に初めて砲丸をつけた時は、とても重く一步進むのも大変に感じたが、今は重さを煩わしく感じることはなく自然に歩けるようになっていた。「少しは勝てる可能性があるんじゃないか」と、カメの気持ちはこの1週間で少し変化していた。

カメは1週間つけ続けた砲丸を外すと、ウサギに渡した。

ウサギは約束通り、その砲丸の鎖を足に巻いてびよんびよんと2, 3度跳ねた。

「重っ！ お前こんなの付けてたの？」

自分で用意したはずなのに、ウサギは驚いていた。

「ゴールは、あの山を越えて先にあるタヌキ池。

お前が勝ったら駅伝には出場しなくていい、

でもオレが勝ったらお前は駅伝に出る。いいな！」

カメはコクリと頷いた。

そして、「せいの」の合図と共にスタートが切られた。

カメは勢いよくスタートを切る。

砲丸を外した体は甲羅に羽が生えたように軽く、ふわふわと空中を飛んでいるようだ。

足も軽やかにどンドン進んだ。

「すごい…ボクこんなに速く走れてる！」

カメは初めての感覚に驚いた。

少し進み、後ろを振り返ると、ウサギはまだスタートラインにいた。

ジャラジャラと砲丸と鎖を入念にチェックしているようだ。

しかし焦っている様子は全く見えない。

さすがのカメも頭にきて「余裕ふかしているうちに差をつけてやる」とスピードを上げようと思った瞬間、ジャラジャラという音が一気に近づき、カメの横を通り過ぎた。

ウサギがすごいスピードでカメを追い越したのだった。

カメが驚いている間もなく、ウサギはジャラジャラと砲丸を引きずりながらも素早い足どりで先へ進み、すぐに見えなくなってしまった。

「なんで…あれを付けているのに…やっぱ勝てっこないよ…」

2分前に感じた自信はすぐになくなってしまった。

気落ちしたその時、カメは前方にあるものを見つける。

軽やかにジョギングをするツルが見えてきたのだ。

ツルは、今度の駅伝の出場メンバーのひとり。

マジメな性格で毎朝ジョギングをしているらしい。

カメは少し頑張って走ると、徐々にツルに近づき追いつくことができた。

「ツルくん、おはよう。駅伝の練習かい？」

「あ、カメくん。君は？」

カメはウサギとの勝負だと言った。

「そうだったね、勝負は今日だったんだ」

「うん…でも、先輩はずっと先に行っちゃったよ…」

「そうかあ、でもカメくん速くなったよね。追いつかれちゃったもの。ボクも頑張らなきゃ！」

ツルはそう言って、次の曲がり角を曲がって行った。

「あれ？やっぱりボク少しは速くなっているのかも…」

少しだけそんな気がした。

ツルはゆっくりとジョギングをしているだけかと思っていたが、話しぶりからするとそうでもないようだった。カメがさっき感じた失望感はどこかへ行ってしまった。でも、ウサギの姿は全く見えない。

カメは続けて走っていると、又あることに気づいた。

自慢のヒゲが風になびいている。

先程までは夢中で気づかなかったけど、落ち着いてみると顔に風が当たってきている。

周囲の葉っぱが揺れていないのを見ると、これはカメが風を切って走っているという確固たる証拠だった。

カメにとっては初めての体験で、しばらくよくわからなかったが、

これが前にウサギが言っていた「風を切って走る」という事なのかなと思った。

「やっぱり、ボク走るの速くなってるみたいだ…」

カメの疑問は確信に変わってきていた。

「走るって気持ちがいい」そう感じたのは生まれて初めてのことで、

ずっとこの気持ちが続いて欲しいと思えた。

しばらく走り、山を越え下り坂にさしかかったところで、

カメは足元にあるものを見つける。

道に沿って赤い点々が落ちている。

それはしばらく道なりに続き、そして道の端から端をジグザグに2往復ほどした後に、脇の草むらに外れていた。カメがその先を目でたどると、そこには苦しんでいるウサギの姿があった。

ウサギは顔中をしわくちゃにして、苦しそうにもがいている。

足元からは、鎖を巻いた足首から血が流れ出ている。ウサギの白い足は真っ赤に染まっていた。

激しい走りの中で足に食い込み、怪我をしてしまったようだった。

「ウサギ先輩!!」

カメがかけ寄ると、ウサギはしかめていた顔を少しだけ戻した。

「カメか…やったな、お前は運がいいな。

早く行け！オレに勝てるぞ。駅伝にも出場しなくていい…」

「何言ってるんですか！こんな時に。

血が出てるじゃないですか！早く手当てしないと…」

「そんなことはいいから、早く行けよ！

オレに勝てば、駅伝に出なくていいんだぞ！」

ウサギは顔を真っ赤にして叫んだ。

「…ウサギ先輩。いいからボクの甲羅に乗ってください。

先輩に勝ってもらわないといけないんです」

カメはウサギを乗せると、ゆっくりと歩みを始めた。

ウサギに刺激を与えないよう一歩ずつゆっくりと歩いた。

「先輩、なんで言ってくれなかったんですか？」

「…何のことだ？」

「さっきタヌキくんに会ったんですよ。その時に聞いちゃいましたよ」

「……」

「…頑張りましょうね！駅伝」

「カメ…いいのか？」

「当たり前じゃないですか。ボクで役に立てるなら…」

ゴールに向かうカメの顔は少しだけ勇敢さを持っていた。

ゴールのタヌキ池までは、あと少し。

(カメ編 完)

ウサギが隠していることとは何なのか。

なぜカメは駅伝に出ようと思ったのか…!?

今回は、新ウサギとカメ（ウサギ編）です。

物語製作 : ファン促物語ライター 眞喜屋 実行 (まきや さねゆき)

<http://haps.chu.jp/fansokustory.html>

株式会社はぴっく hapic@mirror.ocn.ne.jp 担当 : まきや
あなたのオリジナル物語を製作します。お気軽にご相談ください。

【ウサギ編】 ウサギの計画。

ウサギは、何とかカメを説得しようとしていた。

「今回はお前に決めたんだ。いいから走ってくれ！」

「なんでボクなんですか～。もっと速いヒトはいっぱいいるじゃないですか」

ウサギの前でカメは首を振り続ける。

どうしても勝ちたいウサギは、カメが絶対に必要だと確信していた。

ウサギの決意が固まったのは1週間前、駅伝の事前説明会でのあるできごとがきっかけだった。

「ふんっ、白ウサギなんかのチームに負ける気がしねえな」

ライバルである黒ウサギがポロっとこぼした言葉をウサギは聞き逃さなかった。

駅伝は毎年1回11月に行われる、となりの黒ウサギ町との一騎打ち。こ

れまでに9回開催されていて今回が10回目の大会だ。

元々はいがみ合うとなり町通しの親睦の為に始めたものだったが、今はそれが対立の火種となっていた。

「何ふざけたこと言ってるんだ、今年こそウチが勝つ！」

「何言ってるんだよ白ウサギ。オレらに勝ったことねえじゃん」

黒ウサギの言葉は凶星だった。

伝統の一戦と位置付けながらも、これまでの9回はすべて黒ウサギチームに負けている。

それも僅差ではなく大差での敗北だった。

小さなころからライバルとして争ってきた黒ウサギに負けることは

ウサギにとって許せない事で、駅伝の日は1年の中でも1番嫌いな日だった。

キャプテン同士、白ウサギと黒ウサギの間には実力差はほとんどない。

差があるのはメンバーだった。

白ウサギはチームメンバーは貧弱だったおかげで、毎年苦杯を飲まされてきた。

ウサギはもう負けるのはまっぴらだった。

今年は10回目の大会。町長たち役員の間では「勝負にならないから今年限りで辞めさせてもらおうか」という弱気な相談までされているらしい。ウサギはそんな負け犬（負けウサギ？）根性を持つ役員が嫌で仕方なかった。

勝てる根拠はどこにもない。ただ、どうしても勝ちたい。

ウサギは胸がじわ〜っと熱くなっているのを感じた。

そして、勝ちたいという気持ちがウサギの口を動かす。

「今年は絶対ウチが勝つ！」

「無理だよウサギ。そろそろ負けを認めろよ。

今年でおしまいにしてあげようぜ、お前のとこの町長さんもそう考えてるみたいじゃないか」

「今年は勝つ！」ウサギはそれしか言えない。

「お前さあ、そんなに言うなら、ひとつ条件をつけてもいいか？」

「条件？…なんだ」

「ウチが勝ったら、お前の妹のピョン子をオレの嫁にする。どうだ」

「なにい…ピョン子は関係ないだろ！」

「負けるのが怖いのか？勝つんだろ？ウチに」

結局、ウサギは挑発に乗ってしまった。

ウサギの胸には怒りと焦燥感の両方が残った。胸のドキドキはしばらく続いていた。

もう後には引けない。ウサギは勝つしかなくなった。

しかし、目の前のカメはなかなか引き受けてくれない。

町内にも「カメよりももっと早いヒトが…」という役員もいたが、ウサギは断固として譲らなかった。

ウサギには考えがあった。

黒ウサギチームに勝つには、どうしてもカメの力が必要だ。ウサギはそう思っていた。

カメはどうしても引き受けそうにないので、ウサギは最後の切り札としてかけっこ勝負を提案した。

「わかったよ、カメ。じゃあこうしよう。オレとかけっこ勝負をしよう。

そこでお前が勝ったら出場しなくていい」

もちろん、普通に走ってカメが勝てるわけではない。

誰の目にもそれは明らかだ。ウサギは条件をつけた。

---ウサギはハンデとして「おもり」をつけて走る。

ただし、その「おもり」はカメが今から1週間付けていたものとする---

そしてウサギは2種類の重りを用意し、カメに選ばせた。

ひとつは軽めのもの。もう一つは重たい砲丸と鎖。

カメが重たい砲丸を選ぶとウサギはニヤリと笑った。

(よし、計画通りだ)

それから1週間、ウサギは自分のトレーニングの傍らカメの様子を毎日チェックした。カメは砲丸を外さずにまじめにつけている。約束をちゃんと守るのはカメのいい所だ。

1~2日目は重たそうに砲丸を引きずりながら、ゆっくりと一歩ずつしか歩いていなかったが、慣れてきたのかカメは次第に砲丸を気にしないで歩けるようになっていったように見えた。ウサギはその様子を見て、微笑む。

(よし、なかなかイイ感じだぞ、計画通りだ)

そして1週間が経ち、かけっこ勝負の日となる。

ウサギはカメが外した砲丸を受け取った。

「重っ！ お前こんなの付けてたの？」

本心から出た言葉だった。

ウサギが自分で用意した砲丸だったが、実際に身につけてみると予想していたよりもずっと重く感じた。

(あいつ、こんな重いのをつけて歩いていたとは…ひよっとすると…)

勝負がスタートされると、カメは勢いよく走って行った。

ウサギはじっくりと準備体操をしながらカメの様子を確認し、大きく息を吸ってからスタートした。

そして、すぐにカメを追い抜き、そのまま走り続けた。

途中、チームメイトのタヌキが朝練で走っているのを追い抜いた。

これもウサギの計画通りだった。

しばらく走るとウサギはある作戦の為に立ち止まった。

(よし、この辺りでいいかな…)

ウサギはキョロキョロとあたりを見回した。

(オレはここで昼寝をしてカメを待つ。カメはその隙にオレを追い抜く。

しばらくするとオレは起き上がり必死でカメを追いかける。

そしてギリギリで追いつき同着でゴール。カメは負けていないけど勝ててもいない。

『じゃあ出る』と言うと、少し自信の付いているカメはOKする、という筋書きだ。

名付けて『イソップっぽいウサギ大作戦』、我ながら完璧な計画だな)

ウサギは立ち止まると足首がズキズキと痛むのを感じた。

ふと足元を見ると、鎖が足に食い込み血が流れ出ている。

走っている最中は気づかなかったが、いざ止まるとかなり傷は深い。

ドクドクと血が流れているを感じる。

「何だこりゃ」と言っているうちに痛みは更に増してくる。

(まずい…これじゃ本当に走れないぞ)

ウサギが焦っていると、後ろからカメの頭が見えてきた。

予想していたよりもずっと早い。

(くそ…昼寝なんかしている場合じゃない…。これじゃ負けてしまう…)

ウサギは再び歩き出した。

しかし一歩足を進めるたびに鎖が足首に食い込む。

負けられないウサギは、まっすぐに歩けず、道の端から端を行ったり来たりとよろめき歩いた後に、草むらに倒れ込んだ。

(くそお、オレの計画が…)

ウサギはギュ〜っと顔をしかめた。

頭にはピョン子の笑顔が思い浮かぶ。

(スマン…ピョン子。オレは余計な約束をしてしまった…)

足の痛みだけではない心の痛みも大きかった。

もうダメか…と思ったその時、カメが「ウサギ先輩！」と飛び寄って来た。

「カメか…やったな、お前は運がいい。

早く行け！オレに勝てるぞ。駅伝にも出場しなくていい…」

「何言ってるんですか！こんな時に。血が出てるじゃないですか！

早く手当てしないと…」

「そんなことはいいから、早く行けよ！

オレに勝てば、駅伝に出なくていいんだぞ！」

ウサギは顔を真っ赤にして叫んだ。

「…ウサギ先輩。いいからボクの甲羅に乗ってください。

先輩に勝ってもらわないといけないんです」

「…どういうことだ？」

カメはウサギに勝ってくれと言った。

それはカメが駅伝に出るということを意味している。

ウサギがカメの甲羅にゆっくりと乗ると、カメはゆっくりと歩き出した。

カメの甲羅は一步ごとにゆっくりと上下する。そのたびウサギの体も上下した。

ドスドスッと力強く優しい歩みだった。

「先輩、なんで言ってくれなかったんですか？」

「…何のことだ？」

「さっきタヌキくんに出会ったんですよ。その時に聞いちゃいましたよ、ピョン子さんのこと」

(…タヌキの奴…余計なことを…)

「…頑張りましょうね！駅伝」

「カメ…いいのか？」

「当たり前じゃないですか。ボクで役に立てるなら…」

ウサギの目から流れているのは、もう悔し涙ではない。

「でも、何でボクなんですか？他にも速いヒトはいっぱいいるし…」

「そうだな、お前よりも早い奴は確かにいる。でも、オレはお前がベストだと思ってる」

不思議そうな顔をしているカメにウサギは言った。

「駅伝になればきっとわかるよ」

(育ててやるつもりが、逆に教えられちゃったな…計画外だ)

ウサギとカメはゴールへ向かい、ゆっくりと進んでいる。

(おわり)

物語製作 : ファン促物語ライター 眞喜屋 実行 (まきや さねゆき)

<http://haps.chu.jp/fansokustory.html>

株式会社はぴっく hapic@mirror.ocn.ne.jp 担当 : まきや

あなたのオリジナル物語を製作します。お気軽にご相談ください。